国立大学法人 大阪教育大学
大阪教育大学 附属特別支援学校
松本 宜明・池村 憂美・岩橋 鈴奈・迫田 真喜
住岡 優志・丹沢 正太・辻 奈誠子・本多 克敏
森 久美子・森下 紘奈
共同研究者　餅木 哲郎　（大学院連合教職実践研究科）
家近 早苗　（東京福祉大学）

校内にある教育資源活用を試みた「学び合いの場」の実践

［本研究の目的］本校の高等部と中学部が協力して行う「学び合いの場」が生徒への指導・援助にどの様な影響を与えるかを検討する

本研究は令和３年度から令和４年度に行った「特別支援学校の学年の教員による「学び合いの場」の実践」（松本，2023（未公刊））を引き継ぐものである

「学び合いの場」生徒が苦戦している事象に関して、教員で検討する参加が自由な場

［研究方法］

１．対　象　「学びあいの場」３回分の実践と記録
　　「学びあいの場」に参加した教員のべ16名（第１回５名、第２回６名、第３回５名）の振り返り

２．内　容　「学び合いの場」とその参加者との個別の振り返りを交互に実施する。
　　参加者からの意見を次回の「学び合いの場」に反映させ、改善することを繰り返す。

［結　果］

	第１回	第２回	第３回
参加者	高等部５名	高等部５名、中学部１名	高等部３名、中学部２名
学び合いの場	この様な場での意見交換に慣れる。	石隈・田村式援助チームシート５領域版を活用した。	苦戦していることについて参加者で設定する時間を多くとった。
個別の振り返りでの意見(抜粋)	①可能であれば中学部の教員も交えて行いたい。 ②生徒のより詳細な実態把握はより具体的な援助を生み出すことができる。	中学部での経緯やその当時の生徒自身の努力をより詳しく知ることで、現在の生徒の状態を肯定的に捉えられる。	①生徒に関わる教員がこの決定までのプロセスを知ることこそが重要である。 ②生徒に関する事象の原因と考えられる中学部での出来事や経緯を聞くと、現況を改めて冷静に捉え直すことができるようになった。
翌日以降の教員の働き		①高等部教員２名と中学部教員が担任している高等部生徒について、現担任と以前の担任という立場を越えて意見を交わした。 ②検討した生徒の様子を見守るため、複数の教員が授業に顔を出した。	①生徒の心理面の支援として、積極的にオーバーリアクションで関わり続ける教員が高等部と中学部に存在する様になった。 ②更に、放課後にこの対応について意見交換する姿も見られた。

［考　察］

１．「学び合いの場」は学部を越えた教員の連携を促進させたと考えられる。
２．生徒への自発的な援助を促進する機能が「学び合いの場」にあると考えられる。
３．援助シートの様なツールを活用することは有効であると考えられる。
４．今回得られた「学び合いの場」の機能は校内の他の組織にも影響を与える可能性がある。